

『浦潮日報』とその時代 1917－1930

— 居留民、シベリア出兵、極東共和国をつないだ邦字紙

吉田則昭

本論文では、1917 から 1930 年までウラジオストックで邦人向けに生活情報、ロシアと日本に関するニュースを掲載したコミュニティ紙『浦潮日報』を、特に新聞メディア特性、言論内容、軍や外務省との関係から検討する。また、日本国内に所蔵のない 1924 年以降の原紙をロシアで現地調査した。その上で同紙が果たした役割を、三点分析した。

第一に、単なるコミュニティ紙ではない『浦潮日報』の側面を再考するため、各種資料から新聞社組織、編集体制、編集スタッフのあり方を検討した。

第二に、1921 年以降のシベリア出兵撤退の局面において独自の主張を展開し、言論性を発揮したことを紙面分析した。特に居留民らによる「日本軍撤退決議」の主張を検討した。

第三に、日本軍特務機関の宣伝活動からは、プロパガンダ・メディアとして『浦潮日報』を利用し、さらにはロシア語版を創刊したことを、軍や外務省の公文書から提示した。